

山村の暮らしは 自給・協同の有機農業の推進にある



柿木村有機農業研究会会員 2018年3月

ふくはら あつし プロフィール

元吉賀町産業課長、柿木村有機農業研究会会長、島根有機農業協会理事、日本有機農業研究会中国ブロック幹事

1949年柿木村生まれ

1972年より柿木村役場勤務、

1980年岩国市の消費者と提携を開始、1981年柿木村有機農業研究会設立、2009年3月吉賀町役場を退職。現在、有機農業により水稲・野菜など自給的農業を実践し消費者との交流を推進している。

Mail atsushi@sun-net.jp

TEL/FAX 0856-79-2924

<https://www.syokutonou-kakinoki.jp/> 生産者紹介 / 柿木村有機農業研究会



自給の豊かさ、小農の豊かさを追求

40数年前の農村の課題は、いかにして減反を進めるかであった。学校給食ではパンを食べさせているのに米の余剰が増えてきたので米の作付けを減らすということである。ほとんどの棚田は山に近い水田から減反され、杉が植栽された。

その後、減反は転作に変わり、水田を維持しながら米以外の作物を栽培することになった。山村の棚田は2、3年転作すると漏水田になり水田に戻すことは困難になるが、そうかといって水田なので雨が降れば水はたまる。

たまたま収穫できた作物も全国で転作している作物は市場出荷しても価格は暴落、産地化しなければ値段はつかず、機械化して転作物物を推進しても「骨折り損の借金づくり」。せめて「骨折り損のくたびれ儲け」程度にならないものか。競争できる環境にない山村では、売ることを目的にした転作推進には無理があり、自給による家計仕向けを増やすことにした。

大豆や小豆、そば、旬の自給野菜などである。大豆をつくって味噌をつくり、玉ねぎやじゃがいもは年間自給できるようにと、自給の拡大をしていった。そのころ朝日新聞では有吉佐和子の小説『複合汚染』が連載され、近代化農業の推進による環境破壊や健康破壊が見えてきた。

「有機農業による自給運動」、これこそが山村のめざす農業だと確信して自給の豊かさ、小農の豊かさを追求して40年、その成果が消費者との「提携」であり学校給食への供給である。

住民の環境意識や健康意識は確実に変わっていったが、農協合併や行政の合併など常に大きな壁がある。農村では自立、互助・連帯に加えて行政支援がなければ暮らしが成り立たない。今後とも行政に要求し協働しながら、山村の多様な暮らしを仲間と一緒に

追求していくことにする。

集落・地域の農地や農業を次世代にどう継いでいくか

有機農業運動を「次世代にどう継いでいくか」は重要な課題であるが、都市近郊の有機農業と地方の有機農業運動には大きな違いがある。地方の農業は高齢化、担い手不足に加え、農畜産物の輸入拡大や農産物価格の低迷により瀕死の状態である。

農業経営者の平均年齢は70歳を超え、80歳以上の経営者が25%にもなっている。都市近郊では、わが家の農地をどう継ぎ農業をどう継ぐかであるが、山村では集落の農地や農業、地域の農地や農業をどう継ぐかである。

所得の確保は重要な課題であるが、儲かるか儲からないかだけがすべてではない。田舎暮らしの中には、儲からなくてもやらなければならない作業はたくさんある。自給の豊かさや暮らしの楽



写真上 棚田オーナーによる田植え
写真下 日本の棚田百選「大井谷の棚田」

しき、地域文化の継承などを積極的に伝えながら理解してもらわなければ、担い手に継ぐことにはならない。

「暮らし農業」と「産業農業」をバランスよく

「本来あるべき農業」、「食べ方」や「暮らし方」を追求しながら消費者と「提携」し、農業・農山村の課題を共有して活動の輪を広げなければ、農山村の農業を継承することはできない。そのために最も必要なのが自給・協同の有機農業の推進ではないか。

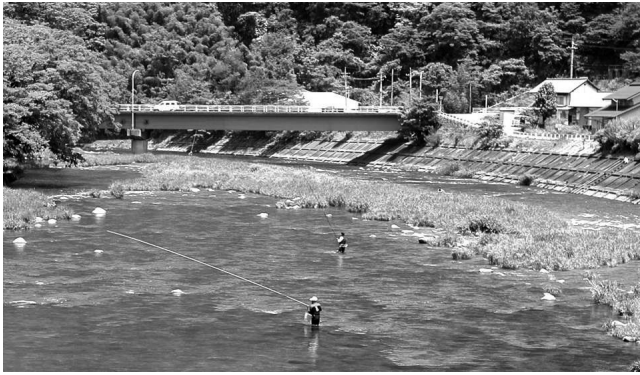
島根県の有機農業推進政策は、先進的な取り組みとして評価されているが、これは島根県が経済優先に対応できる地理的条件はなく、高度経済成長期には「過疎」という言葉の発祥地であるほど人口減少を余儀なくされたが、その代わり環境保全や生物多様性を育む地理的条件を生かした暮らしを考えると、先頭に立てる環境にあった。その必然的な結果ではないのか。

島根県の有機農業運動が全国のモデルになれるように「暮らし農業」と「産業農業」をバランスよく発展させていきたい。

U・イターンの「自然との共生」「むらとまちの共生」が山村の未来を拓く

災害列島で大規模な自然災害が相次ぎ、異常な状態が続いている。しかも原発の危険性とも隣り合わせである。夏のシンポジウムの特別アピールが現実の問題になる。「備えはできているのか」とよく言われるが、大きな天災に人災が重なれば、取り返しのつかない大惨事になる。

この10年「オール電化にしませんか」という電話がよく掛かってくる。「オール電化にはしません。孫が炎を見たことがないようでは将来が不安です」と答える。孫が遊びに来たときは、できるだけ一緒に薪で風呂焚きをするようにしている。マッチを使い、



↑ 清流「高津川」。全国1級河川の水質ランキングで1位に6回選ばれている



↑ 会員の圃場

薪を焚くことを教える。どこで天災に遭うかわからないが、火を使うことができれば命を繋ぐことができるからである。
消費者との交流の中で毎年「山菜を食べる会」を実施しているが、山に入ってもワラビやウド、セリやクレソンがわからない消費者もたくさんいる。大人も子どもも自分で採取して、一緒に調理して食べる。こうした経験がいつか役立つ時が来るかもしれない。「飢餓の年は山に入れ」の教訓を遊びながら学ばなければならぬ。

Ｉターンの新規就農者のほとんどは有機農業を志向しているが、東北の震災から逃れて来ている人、震災に備えるために村に入る人など自給的な暮らし農業をめざしているＩターンの多い。農家レストランやカフェ、農家民宿などにも挑戦しながら交流人口を増やし、流域の定住対策や活性化につながるよう期待している。

食の伝統や暮らしの技を守り継ぐことが山村の有機農業運動だと考えている。

地域の行事

道の駅かきのきむら収穫祭 2018年11月11日(日) 10:00～15:00

会場 道の駅かきのきむら周辺 吉賀町柿木村柿木 500-1

問合せ先 エポックかきのきむら(株) TEL 0856-79-2350

吉賀町農業文化祭柿木会場 2018年11月18日(日) 9:00～15:00

会場 柿木庁舎周辺 吉賀町柿木村柿木 500-1

問合せ先 吉賀町役場企画課 TEL 0856-77-1437

2018 食と農の映画祭 in ひろしま 2018年11月30日(金)～12月6日(木)

会場 八丁座 広島市中区胡町6-26 福屋八丁堀本店8F

問合せ先 シネマキャラバンV・A・G 友川千寿美 TEL・FAX 082-285-8165

詳細は31ページ参照

関野吉晴さんの講演会 2019年2月3日(日) 13:00～15:45

4月に吉賀町で『カレーライスを一から作る』の上映会と前田亜紀監督のトークイベントを開催しましたが、これに続いて今回、関野吉晴さんの講演会を計画しました。

会場 島根芸術文化センター「グラントワ」 島根県益田市有明町5-15 電話 0856-31-1860

主催 島根県 参加費 無料

問合せ先 関野良一(せきの よしかず) TEL 090-4595-6265